

# 生き方リサーチ

豊かだけど不安な中で――

## 昭和ブーム全開

公開中の映画「ALWAYS 三丁目の夕日」(山崎貴監督)が大人気だ。すでにご覧になった方も多だろう。舞台は昭和33年東京都心部、市井の人間模様が描かれた作品だが、昨年末に入場者は200万人を超え、日本アカデミー賞全部門で優秀賞受賞とスゴイ。

さらに、この映画の観客層は、年代性別をほぼ問わず、さらに一人で何度も映画館に足を運んでいる人も少なくないのも特徴という。そして、多くの観客が映画を観ながら涙を流している。かく言う私も自身、目頭が熱くなり、2回目に足を運ぼうとしている。しかし、この映画のヒットには明らかな前兆があった。



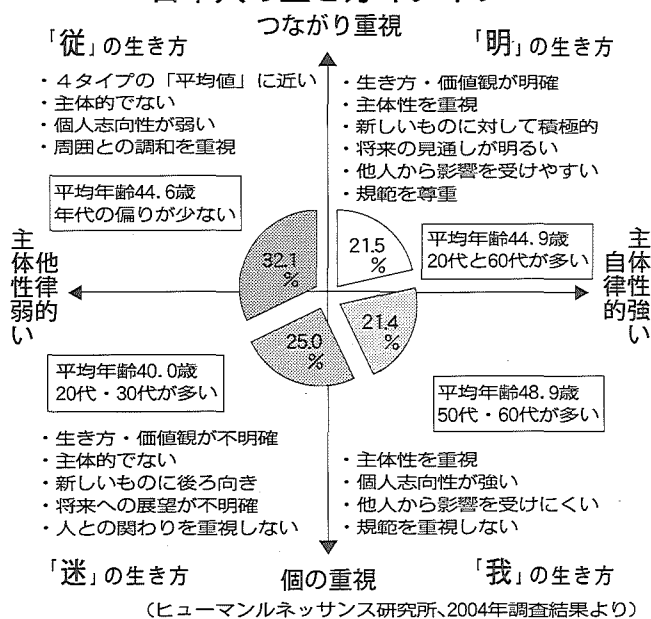
昭和33年に完成した東京タワー

いわゆる「昭和ブーム」である。昭和と言っても、特に30年代であることが重要だ。それでは、今を生きる私たちがとって、昭和30年代が意味する価値は何なのだろうか？「生き方」をテーマとした年始めの本コラムにて少し考えてみたい。

## 「ふり返りたい」時代

昭和31年版「経済白書」の冒頭「もはや戦後ではない」という戦後終結宣言で、30年代はスタートしたと言えよう。マインナスからゼロへのリセット完了。そして、神武景気と呼ばれた好況が訪れ、ゼロからプラスへの上昇が始まる。

## 日本人の生き方4タイプ



# 新しい希望と目標はどっちに

その直後、なべ底不況の到来かと思いきや、堅実かつ頑強な生活者による当時の社会力は、まさに映画の舞台、昭和33年からの岩戸景気を経て、39年の東京オリンピックへと駆け上がる。社会が健康で元気で、光に向かっていたのだ。

それでは今はどうだろう。光が見えない中、病気がちでグズグズ停滞している。そんな社会の中で、「ふり返れば未来」を期待するのは当然かもしれない。

## ふり返る景色を知っている

## 希望・目標・現実・問題

この映画の中には、東京タワーというシンボリックな目標がある。「快適生活」への三種の神器獲得という現実の目標がある。いつか、つかい会社、金持ちになるといいう希望がある。その一方で、自分たちの暮らしの現実を、しっかりと承知して、現実と目標

の間を、生き渡っていける人々がいる。

目標と現実をとりえて、そのギャップとしての問題と、解決のための手段を心得ていることは、まさに「問題解決の基本」だ。これらがそろわない今の世の中は「生きる」という問題の解決に辿り着けずに不安になっている人々であふれるわけだ。

マーケティングの世界ではブレイクスルーが難しい問題が多いとは言え、「目標」と「現実」その間の「問題」、「解決手段」これらすべてが明らかでない状況というのは考えにくいだろう。

## 「解決手段」これらすべてが

しかし、今の社会を生きる多くの人は、とにかく「立ち止まってはいけない」ということ以外には、生きる目標も現実もはっきり見通せず、だから問題も明らかにならず、解決手段も探せずにいるのではなからうか。

## 日本人の生き方4タイプ

ここで、私たちHRIが実

施した調査のクラスター分析結果を紹介したい。分析の結果、図に示すように、個の強さと、つながり重視の強さによる座標上に、「明」「我」「従」「迷」4タイプの日本人の生き方が浮き彫りとなった。これら4タイプの構成比は、ほぼ均等であったが、シニア世代には「明」と「我」が多いのが特徴だ。

それ以外の波間に浮かぶ大多数は、波に従いまかせるか、どちらに泳ぐか迷えるか、自分だけはとがむしやらに泳ぎ進むのかだ。

そして、今の生き方を百点満点で採点してもらおうと、「明」の人たちは69・8点、「迷」の人たちは54・5点、両者の間には15点もの差が生じていた。

こういう今を生きる人たちを前提とすると、あの老若男女不問の「三丁目の夕日」人氣は、とても納得できる。あの時代を生きた当事者は、幻ではないよき時代をふり返る。先の希望を持っていない若者たちは、居心地よさそうな昔を羨望する。そして、渦中の中核世代は一時の逃げ場所を求め、当初一番のターゲットとして想定していたかもしれない団塊世代(50代後半)の男性には、今ひとつ人氣が無いは興味深い。彼らは、過去をふり返るより、もうちょっとでたどりつけそうな「明」へ逃げ切り切りたいようだ。

## 立ち上がる東京タワー

新年早々、絶望的にはなりたくない。希望を持ちたい。「ふり返れば未来」という人もいるけれど、後戻りできないことは誰もが承知している。

やはり、希望の持てる目標が必要だ。映画では、シンボリックに建設途上の「東京タワー」が何度も映し出される。リリー・フランキーさんの小説『東京タワー』もベストセラー。寒い中、午前0時の東京タワー「ライトダウン伝説」に集う若いカップルも多い。同時期に、大阪では「通天閣」が建てられていた。日増しに天空高く伸びゆくタワーは、棒温度計の中の赤い油のように、みるみる上昇する。この幸せのパロメーターの景色に、人々は涙している。

## 少し立ち止まってみよう

そして今の時代、人々の幸せ感は「泣けるか」が尺度になっている。「カワイイ」より「泣ける」、マーケティングのパラダイムシフトだろうか。

それでは2006年の私たちは、このパロメーターをどこに探せばよいだろう。それは、もはやタワーや高層ビルではないだろう。年末、東京タワー内に日本経済の負債の重さを体感できるコーナーが開設されたことは、とても象徴的に感じられる。

さらに高く、宇宙ロケットとなると私たちの肉眼では不可視だ。先行き不安な中で、目に見えて確かな実感を、豊かなつながりの中で得られる幸せ。これは、足もとの地面の土や自然の変化のサイクルにこそ見つけられるのかもしれない。それは、走り続けていては目にとまらない。少し立ち止まって、さあ、今年も登る朝陽を眺めよう。(オムロン・ヒューマンリソース研究所 中間 真一)